1000年先の未来へ。
美しい里、豊かな海

satoumi project
Seto Inland Sea, Kagawa

かがわ里海大学2022　ステップアップ講座

かがわの里海 この人に聞きたい！
開催しました！

- 日時　令和5年1月15日（日）14：00～16：00
- 会場　オンライン開催（Cisco Webex 利用）
- 聞き手　岡 加依子 氏（かがわ里海ガイド/ラジオDJ）
- 語り手　男谷 勝 氏（漁師/高松地区底曳網協議会会長）

1月15日（日）、オンラインにて「かがわの里海 この人に聞きたい！」を開催し、10名が受講しました。本講座では、わたしたちに新鮮でおいしい魚を届けてくれる漁師の男谷さんに、そのための工夫や熱い思いについてお話を伺いました。

イカの産卵礁づくりを始めたきっかけは、今から6年ほど前に研修で愛媛県伊方町を訪れたことで、その際にイカの水揚げ量の多さに驚き、何か自分でも出来ることはないかと考え、2020年から取り組みを始めたそうです。産卵礁づくりにあたっては、Youtube等を参考に試行錯誤を重ね、水深約7～11ｍの海底に約10m間隔でヒノキやバベの木を10本ほど束ねたものをイカの産卵時期にあたる4月に沈め、イカが大きくなる9月に回収しているそうです。はじめは2ヶ所だったイカの産卵礁も2022年には6か所に増やし、さらに今年はその倍の12か所に増やす予定だそうです。

※女木島で伐採されたカイヅカ
（2022年に使用された木）

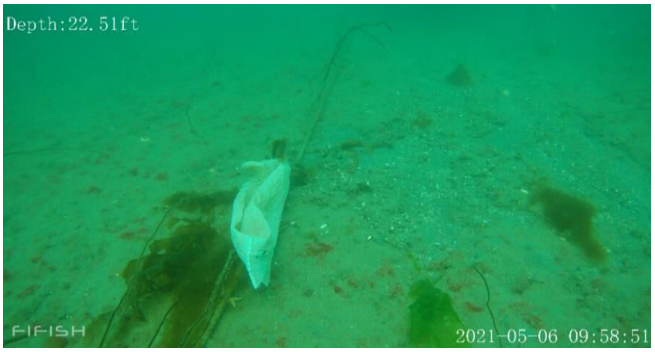
講座の前半では、水中ドローンによる動画を見ながらイカの産卵礁づくりについて解説がありました。2021年の5月と6月に撮影された映像からは、ヒノキやバベの木に付着するイカの卵が増えていく様子が伺えました。また、つがいのコウイカの交接の様子や、水中ドローンを仲間だと思い込んで近づいてくるカミナリイカの様子なども撮影されており、男谷さんもここまでの映像が撮れているとは思ってもいなかったそうです。

※カミナリイカの卵

※コウイカ交接の様子

その一方、砂地となってしまった海底の様子も映し出されていました。男谷さんによると、藻場が不足した結果、イカが産卵場所を求めて漁港のアンカーに卵を産み付けていたこともあったそうです。また、せっかく産卵礁となる木を沈めてもナイロン等の生活ごみが木に引っかかってしまうとイカが卵を産み付けなくなるそうで、海ごみ回収についても取り組みを行っているというお話がありました。

産卵礁づくりの結果、イカだけでなくカワハギやフグの漁獲量も増えてきており、今後は高松地区だけでなく県内の漁協と連携して活動の場を広げていきたいそうです。産卵礁はイカだけでなく稚魚の隠れ家になるなど、海の生き物にとってなくてはならない場所であり、映像を通して藻場不足の現状について再認識することが出来ました。



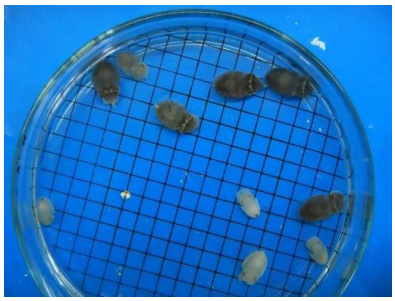
※砂地となった海底の様子（水深約7m）

※水中ドローン

休憩後、講座の後半ではコウイカとカミナリイカについて解説がありました。孵化したばかりのイカを見比べると白い方がコウイカで、色のある方がカミナリイカだそうです。どちらも約5㎜～1㎝程の大きさしかありませんが、大人と同じ形をしています。イカの成長はとても早く、約2か月で約20㎝程の大きさまで成長するそうです。

次に、魚を新鮮な状態で出荷するための工夫について語っていただきました。マダイを出荷する際には、消費者の方に新鮮な魚を食べて欲しいという想いから血抜きと神経締めを行い、昨年から「勝丸」と書かれたステッカーと一緒に出荷しているそうです。今では新鮮で美味しいと評判を呼び、男谷さんの魚を目当てにスーパーへ買い物に来る消費者の方も増えたそうです。また、アオリイカ、シタビラメ、アコウ等の写真からも出荷前の鮮度の高さが伝わってきました。

※コウイカの卵


※コウイカとカミナリイカ（5㎜マス）

※勝丸ステッカーが貼られたマダイ

最後に、受講者からの質問をチャットで受け付け、「藻場が減少した理由は？」、「網にかかったもので珍しかった生き物は？」等の質問が寄せられました。オンラインでの開催となりましたが、漁師さんの生の声を聴ける貴重な講座となりました。